

同志社大学

同志社社史資料センター報



第19号
2022年度

1. 巻頭言：2022年度の報告にあたって
2. コラム：ジェーンズ邸再建に寄せて
—スポーツは厳しく、そして何よりも楽しく—
—スポーツに取り組む学生の成長を願って—
—新型コロナウイルス感染症対応記録—
—拡大防止からの転換—
3. 資料業務
4. 『同志社百五十年史』編纂
5. 展示
6. 公開講演会
7. 研究活動
8. 第180回新島襄生誕記念会
9. ハリス理化学館同志社ギャラリー
10. 新島旧邸
11. 委員会

同志社社史資料センター規程

2004年4月24日制定
2004年5月 1日施行

改正 2010年 2月18日
2012年 2月16日
2013年10月26日
2015年 3月20日

(設置)

第1条 本学に同志社社史資料センター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、創立者新島襄並びに同志社関連資料の収集、整理、保存及び公開業務を継続、発展させ、同志社創立以来の歴史と伝統を後世に継承していくとともに同志社教育の充実と発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- (1) 同志社社史資料の研究、収集、整理、保存及び公開に関すること。
- (2) 新島研究に関すること。
- (3) 同志社社史編纂に関すること。
- (4) 『同志社談叢』の発行に関すること。
- (5) ハリス理化学館同志社ギャラリーの管理運営に関すること。
- (6) 新島遺品庫の管理運営に関すること。
- (7) 新島襄旧邸の管理運営に関すること。
- (8) 新島襄及び同志社建学の精神についての啓蒙活動に関すること。
- (9) その他必要な事業

(所長)

第4条 センターに所長を置く。

- 2 所長は、学長が任命し、センターの業務を統括する。
- 3 所長の任期は1年とし、再任を妨げない。

(同志社社史資料センター委員会)

第5条 センターに同志社社史資料センター委員会(以下「センター委員会」という。)を置き、以下の事項について審議する。

- (1) センターの事業に関すること。
- (2) 社史資料調査員の候補者推薦に関すること。
- (3) その他必要な事項

(センター委員会の構成)

第6条 センター委員会は、次の者をもって構成し、委員は学長が委嘱する。

- (1) 所長
- (2) 教務部長、事務局長、人文科学研究所長、歴史資料館長、広報部長及び法人事務部長
- (3) 女子大学、中学校・高等学校、香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校から各1名
- (4) 学識経験者若干名

2 第1項第3号に掲げる委員は、各学校長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

3 第1項第4号に掲げる委員は、所長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

4 センター委員会は、所長が招集し、議長となる。

5 センター委員会は、委員の過半数をもって成立し、議事は出席者の2分の1以上の賛成をもって決する。ただし、第5条第2号に係わる議決は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(運営委員会)

第7条 センター委員会に同志社社史資料センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会は、第3条に掲げる事項についてセンター委員会の要請に基づき、必要な事項を検討する。

(運営委員会の構成)

第8条 運営委員会は、次の者で構成する。

- (1) 所長
 - (2) 第6条に掲げる者のうち所長が委嘱する者若干名
 - (3) 所長が必要と認めた者若干名
- 2 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。
- 3 委員会は、所長が招集し、議長となる。

(事務局)

第9条 センターに事務局を置く。

- 2 事務局に職員若干名を置き、センターの事業、委員会に関わる事務、その他必要な事務を行う。
- 3 センターの事務組織は、同志社大学事務機構規程に定めるところによる。

(社史資料調査員)

第10条 事務局に社史資料調査員たる職員若干名を置く。

- 2 社史資料調査員は、社史資料の収集、整理、調査、企画、展示等の業務を行う。
- 3 社史資料調査員の選考に関する事項は、別に定める。

(事務の所管)

第11条 この規程に関する事務は、同志社社史資料センター事務局が行う。

(改廃)

第12条 この規程の改廃は、センター委員会及び部長会の審議を経て、学長が決定する。

附則)

この規程は、2015年4月1日から施行する。

2022年度の報告にあたって

同志社社史資料センター
所 長 服 部 伸

2022年度の同志社社史資料センターは、新型コロナウイルス感染症の日常化の中で、できる限り制限を取り除きながら、活動を活性化させるという難しい対応を迫られた。

ハリス理化学館同志社ギャラリーの展示も、訪問者への制限を緩めながら、感染の広がりを抑えることが求められたが、さまざまな角度から同志社や京都の歴史を振り返る有意義なものとなった。

第25回企画展「書におぼえあり—先人の書跡、同志社の足跡—」では、新島遺品庫収蔵資料の新島襄、八重の書をはじめ、岩倉具視、井上馨、金子堅太郎、徳富蘇峰といった、著名な人物の書や、書にまつわる道具を中心に展示して同志社の歴史を紹介した。第26回企画展「同志社大学商学部100周年 霊智を磨きて、学徒を育つ—同志社高等商業学校のあゆみ—」では、商学部の協力を得て、2022年に創立100年を迎えた商学部の前身である専門学校高等商業部・高等商業学校・経済専門学校の歴史を、第一次世界大戦景気をきっかけに始まる大正期の高等教育拡充期から、戦時統制による改編を経て、第二次世界大戦後の新制大学設置という社会の変化の中で位置づけた。歴史資料館主催・宮廷文化研究センター共催で、図書館と文化情報学部の協力を得て開催された第27回企画展「源氏物語の世界—宮廷文化の余薫—」では、平安時代に紫式部によって書かれた宮廷文化の花形である『源氏物語』が、江戸時代には、多くの人々に愛され、いかに生活の中に浸透していたのかを本学所蔵の資料を中心に示した。

特集展示では、前年度3月から4月に「宮廷ゆかりのひなめぐり展」、7月から8月に「二条家文書—和歌文学の世界—」を開催したほか、特別陳列では同志社大学美術部クラマ画会「後期展」、同志社大学写真同好会「新人・2回生展」、同志社大学書道部「二回生展『結』」、同志社女子大学学芸学部メディア創造学科有賀ゼミ卒業制作体験型空間作品展示「Link」を開催した。

このような外へ向けての広報的活動と並んで、社史資料センターの主要業務である所蔵資料の整理、対外調査、さまざまなレファレンス業務などを着実に進めた。とくに、今後寄贈が想定される、同志社および明治期キリスト教伝道に関する重要史料を有する文書受入のめどが立ったことは言及に価する。大量の資料を受け入れるために当面の収蔵場所を確保したが、重要史料の受入のために、収蔵場所の拡充が望まれる。また、『新島研究』『同志社談叢』『新島襄生誕記念懸賞論文入選作品集』などの定期刊行物は予定通り発行することができた。

『同志社百五十年史』編纂事業は、第1回配本予定の第3巻の項目執筆が進み、原稿が集まりつつあり、出版に向けた作業を行っている。さらに、第1巻、第2巻の編纂に備えて、新聞検索や資料調査活動も進みつつある。

以上のように、新型コロナの影響を抑えつつ、多くの事業を推進することができた。これも、日頃から社史資料センターを支えてくださっている同志社内外のみなさまのご協力のおかげである。この場を借りてお礼を申し上げ、2022年度の報告とさせていただきます。

ジェーンズ邸再建に寄せて

同志社校友会

理事・熊本県支部相談役

木下 智夫

2016年(平成28年)熊本地震発生

コロナ禍のこの3年間、全国民が感染症と戦ってきたが、そのさらに3年前に熊本県民は2度にわたった「2016年(平成28年)熊本地震」を経験した。熊本県において過去に例の無い最大震度7の巨大地震であった。

私が属する「ジェーンズの会」にとってのシンボル「熊本洋学校教師館(ジェーンズ邸)」は、4月14日の1度目の地震(前震)で壁が崩れるなど大きく損壊した。いち早く現場に駆け付けた黒田孔太郎副会長が撮影された写真をご覧になった方々もおられるであろう。

私もかなりのショックを受け、この後の余震による建物への影響も心配していたところ、1回目の地震発生からおよそ27時間後、16日の未明、再び大きな揺れ(本震)が熊本市や益城町を襲った。親族・知人・友人の安否を互いに取り合う中で「ジェーンズ邸 全壊」のニュースが飛び込んできた。

同志社校友会からのエール

地震発生からおおよそ一ヶ月後の5月10日に同志社校友会の「5月理事会」が開かれた。「大きな被害でしたね。お見舞い申し上げます」と理事らから声を掛けられた。その後に続く言葉は「ジェーンズ邸の被害の規模は?」「再建は出来るのか?」であった。

この日の理事会は井上礼之校友会会長(ダイキン工業会長)のお見舞いの言葉から始まった。理事会においても各々の理事から、お見舞いやジェーンズ邸を心配する発言が続いた。私は「熊本県発表のジェーンズ邸の被害額は約6億円。再建は可能と専門家は言っていますが再建費用は被害額の倍以上の十数億円は必要になるでしょう。」と答えた。

実は熊本地震発生の75日前、1月29日から30日まで、熊本市で「同志社創立140周年記念・同志社ゆかりの地フェア」が開催され、全国の校友・関係者と熊本県内在住の校友合わせて約300人が集っていた。29日には九州学院高等学校で、村田晃嗣同志社大学長や湯浅康毅新島学園理事長(群馬県安中市)らによる鼎談が実施され、翌30日はフェア参加者のうち約100人が熊本バンド結盟の地・花岡山山頂にある「奉教之碑」の前で「熊本バンド結盟140周年記念早天祈祷会」に参加した。その足で参加者らはジェーンズ邸や徳富記念園など「同志社ゆかりの地」を巡り、最後は熊本草葉町教会で熊本バンドの若者たちが食したと考えられる「シチュー」が振舞われ、フェアが盛会裏に終えたところであった。理事会に出席していた理事の多くがフェアに参加しており、ジェーンズ邸全壊の知らせは対岸の火事ではなかった。このような認識のもとで理事会での議論が進み、熊本県支部が主体となってジェーンズ邸再建に向けた募金活動を立ち上げる事になった。

募金活動

この時に設定された目標額は1,500万円であった。もともとジェーンズの会は何度も世話人会を開き、倒壊した建物に埋没した史資料の救出や崩壊現場の保全などについて、熊本市の文化財課も含め話し

合いを実施しており、「文化財を雨から守れ!」と熊本市に意見書も提出していた。その文化財課の担当者らとの話し合いで、史資料の救出・クリーニング費用だけでも「800万円から1,200万円程度は必要」との見積もりが出ていることを知った。これを根拠として目標額を提案し、承認を得た。その後、私は熊本の地銀2行に口座を設けて募金活動を開始し、国内48支部、海外31支部の協力を受けることができた。

主体的には、ジェーンズ邸を描いたTシャツを作成し、全国の支部で購入していただいた。他方、同志社小学校の保護者会では、くまモンとコラボしたトートバッグを製作し、販売益金を募金として協力いただいた。また、同志社出身者が経営する「食の店」を紹介するグルメ本の売上益金を募金として協力していただいた。その他各支部のクリスマス会や懇親会などでも募金を呼び掛けていただいた。

募金口座の代表を務めた私も、九州各県支部総会や関西地区支部クリスマス会などに招かれ、そこでジェーンズ邸や徳富記念園の被害状況を説明した。2016年(平成28)9月にはニューヨークで校友会初の海外大懇親会が予定されており、「熊本地震の募金も呼び掛けている。集まったお金を懇親会の席で渡したい。然るべき方に来て欲しい」という要望が校友会本部に届いたそうで、私が渡米することになった。

この時のニューヨーク行きは、大学を卒業してから47年間、想像しえなかったボストンまで足を延ばすことに繋がった。新島襄の母校アーモスト大学への訪問も叶い、ジョンソン・チャペルでは北垣宗治先生に迎えていただき、感激した。

本当に多くの方々のご協力のお陰で、活動開始から22か月後、2018年(平成30)2月末に目標額達成の目途が立ち、3月16日校友会・中村友一副会長を代表として熊本県支部役員ら5人が熊本市を訪問し、大西一史市長に「同志社とゆかりの深いジェーンズ邸の再建にご活用いただければ幸いです。」のメッセージを添えて募金目録を贈呈した。その後、3月27日に熊本市が指定する口座に全額納金し、募金活動は終了した。なお、ジェーンズ邸は再建され2023年(令和5)9月1日に再開館予定である。

おわりに

私が在学中、熊本県人会の一大行事が「夏休み中の花岡山の草刈り」であった。花岡山の「奉教之碑」がある敷地一帯の清掃活動が、私の卒業後の校友会会員としての緒でもあった。19歳から始まった私の同志社人としての歩みの中で、熊本地震は多大な知識吸収の機会となった。80歳に届こうとする今日、熊本地震被災経験の中で成長出来たのか、今も自問の日々である。



同志社校友会より熊本市長へ寄付金1,500万円を贈呈
2018年3月16日撮影



再建したジェーンズ邸
2022年12月撮影

スポーツは厳しく、そして何よりも楽しく —スポーツに取り組む学生の成長を願って—

同志社社史資料センター
事務長 太田 博之

2021年度の全国大学史資料協議会全国研究会のテーマは「大学スポーツ史とアーカイブズ」であった。これに関連して2022年度と同西日本部会第2回研究会のテーマは「大学ミュージアムの利活用～中京大学スポーツミュージアムを事例に～」であり、併せて中京大学スポーツミュージアムの見学会もあった。さらに、私は野球伝来150周年を記念した「Enjoy Baseball—福澤諭吉記念慶応義塾史展示館2022年春季企画展—」も鑑賞した。

学生時代に登山に熱中し、現在、同志社大学体育会硬式野球部事務局長として大学スポーツに関わっている私にとって、上記の研究会と企画展は大変興味深いものであった。そこで、これらのことを通して考えたことを簡単に紹介したい。

全国研究会において、高岡裕之関西学院大学文学部教授から、「近現代日本の体育・スポーツ史とその特徴」という講演があり、その中で体育とスポーツの違いについて説明があった。体育には鍛錬や修行という側面があるが、スポーツには娯楽という意味合いが強いということである。スポーツの語源はラテン語の「deportare（デポルターレ）」であり、「義務からの気分転換・元気の回復」とされるように娯楽的側面が強い。これに対して体育は、「知育・徳育・体育」に象徴されるように、学校教育の一環として児童・生徒・学生を鍛えるという役割を有してきた。

そして、日本においては体育とスポーツの境界線があいまいであるという特徴がある。それは、学校におけるクラブ活動が盛んなことに表れており、市民スポーツが盛んなヨーロッパとは対照的である。

このような状況の中で、2018年に日本体育協会が日本スポーツ協会に名称を変更したときに、私は、日本におけるスポーツに対する認識がようやく欧米に近づいたのではないかと思った。

スポーツを刹那的ではなく心から、時には歓喜の涙や悔し涙とともに楽しむためには、厳しい鍛錬も必要である。鍛錬をしなければ体力もつかないし、技術も向上しない。しかしながら、日本のスポーツ界は鍛錬のウエートが大きすぎたように思う。それは、時として「しごき」や「体罰」に結びつくこともあった。この弊害に日本人がここ10年ぐらいで気付きはじめ、スポーツを楽しもうという文化に徐々に変わっているように感じる。日本の競技力向上の背景には、強化費の増額やナショナルトレーニングセンター等の施設の充実とともに、選手のスポーツを楽しもうというマインドの変化があるのではないだろうか。

過去のオリンピックを始めとする世界大会では、期待されながら敗れた選手が「国民の皆様に応じない。」とか「流れを止めてしまって責任を感じます。」等と発言していたが、最近はそのような発言をあまり聞かなくなった。過度な責任感を持って競技に臨むのではなく、まず、自分自身がスポーツを楽しもうと

いうマインドが結果的に好成績に結び付いているように感じる。

慶応義塾の企画展は、「Enjoy Baseball」というタイトルであった。当初、私は、これは企画展のキャッチコピーであると思っていた。ところが、慶応義塾野球部の長年の理念であることを認識し、スポーツの持っている本質を早くから理解されていたことに驚いた次第である。野球は他のスポーツ以上に修練という性格の強いスポーツである。それは、「野球道」という言葉に表れている。これは、柔道、剣道、空手道等の格闘技と同様に修業的な側面が強いことを示す言葉である。このような野球の世界において、野球を楽しみながら、大学日本一に8度も輝き、強豪ひしめく神奈川県代表として、今春の選抜高等学校野球大会を含めて、28回も甲子園大会に出場している慶応義塾野球部に敬意を表するものである。

また、今年の3月に開催された野球の世界大会WBCでは、見事に侍ジャパンが優勝したが、日本の選手を引っ張ったダルビッシュ有投手が次のようなことを話していた。「小さい頃、楽しそうだから野球を始めたわけで、その原点をわかってほしい。とにかく楽しくやるのが野球。昨日の自分よりもプレーがうまくなるために努力すること。仲間を思いやり、教え合い、全員で力を合わせて戦うこと。そして、それはすごく楽しい。」日本の若き侍たちは、このダルビッシュ投手の言葉どおり戦い、世界一を勝ち取った。日本人として誠に誇らしく、そして、スポーツを楽しんでやるということを彼らに教えられたように感じた。

さて、次に、全国研究会において、來田享子中京大学スポーツ科学部教授から、「大学スポーツミュージアムの可能性 ―中京大学における史資料の収集と利活用を事例に―」と題して報告があった。その中で、「中京大学の学際的なスポーツミュージアムを本学体育会学生が見学し、目の前の視点（競技で勝利すること）にこだわるのではなく、多角的な視点からスポーツをとらえ、アスリートである前に、学生であることを認識することができるようになった。」という報告に感銘を受けた。

私は学生支援業務を合計約11年間担った。学生支援の世界では、2000年に出された文部科学省報告「大学における学生生活の充実について―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」がターニングポイントになっている。この報告では、正課外教育の積極的なとらえ直しが提唱されている。すなわち、学生と教職員が正課外教育を通じた人間的なふれあいにより、学生が人間力を身につけるという理念である。本学でもこの理念に基づいて学生支援を行ってきた。私の経験から考えて、確かに体育会活動を通じて人間力を身につけて卒業していく体育会学生が多い。しかしながら、勝利至上主義に囚われて体育会活動に熱中するあまり学業がおろそかになる学生も残念ながら存在する。また、大学をアピールするために、体育会を強化する大学も増えている。そのような状況の中で間違ったエリート意識を体育会学生が持つこともある。体育会学生もアスリートである前に学生であり、学生の本分である学業をおろそかにしてはいけませんが、そのことを十分に理解していない学生や指導者も存在する。古くて新しい課題である。

中京大学スポーツミュージアムには、『「多様性」を象徴する第32回夏季五輪東京大会のエンブレム』等、学際的な資料も確かに展示されていた。

体育会である以上、勝利を目指し厳しく鍛錬するのは当然であるが、スポーツを楽しみ、学生としての教養と豊かな人間性を備えた多くの学生アスリートが生まれ、各大学の活性化に寄与することを願うものである。

新型コロナウイルス感染症対応記録

—拡大防止からの転換—

同志社社史資料センター
竹森 宏和

はじめに

2019年12月、中国武漢市において新型コロナウイルス感染症の発症が最初に確認されて以来、ウイルスは変異と拡散を繰り返し、人々の日常を一変させた。それから1年余りが過ぎ、2021年度、日本では第4波（3～4月頃）、第5波（7～9月頃）、第6波（1～3月頃）の感染急拡大が見られ、京都府を含む各地に緊急事態宣言が発令され、また、まん延防止等重点措置が適用された。本学では、「同志社大学版新型コロナウイルス感染症拡大予防のためのガイドライン」第5、6版（以下、「ガイドラインx版」）、「対応について」【第13～22報】（以下、「対応xx報」）、「新型コロナウイルス感染拡大防止の手引き」第3～6版（以下、「手引き」）が発出され、同志社社史資料センター（以下、社史）においても、これらを順守し感染拡大防止に努めながら、日常業務や種々の活動を継続した。

2022年度 同志社社史資料センターの新型コロナウイルス感染症対応概観

2021年度、緊急事態宣言発令中やまん延防止等重点措置適用期間中には、学外者の不要不急のキャンパス入構が制限されたため、社史でも新島旧邸（以下、旧邸）、ハリス理化学館同志社ギャラリー（以下、ハリス）への入館者を学生・教職員等の本学関係者に限ったが、2022年度は緊急事態宣言発令・まん延防止等重点措置適用がなされず、「新島旧邸用新型コロナウイルス感染症拡大予防のためのガイドライン」（以下、「旧邸ガイドライン」）「ハリス理化学館同志社ギャラリー用新型コロナウイルス感染症拡大予防のためのガイドライン」（以下、「ハリスガイドライン」）を順守しながら公開を継続した。なお、新型コロナウイルス感染状況等の社会情勢の変化に鑑み、「ハリスガイドライン」については、第1回ハリス理化学館同志社ギャラリー運営委員会（6/13）、「旧邸ガイドライン」については、第1回同志社社史資料センター委員会（7/6）において内容を一部改正し、見学における制限事項等を部分的に緩和した。

旧邸では、例年多くの来館者が訪れる春の特別公開（4/1～5）は、まん延防止等重点措置解除直後であり、感染状況を考慮して開催を取りやめた。

ハリスでは、社史主催第25、26、28回企画展、歴史資料館主催第27回企画展と特集展示（本誌p.10参照）が開催されたが、「ハリスガイドライン」の「人が集うイベントを館内では行わない」との規程を「来館者による館内での説明等は許可しない」と改正したことにより、第28回企画展ではハリス館内で展示解説を行

うことができた。学生の特別陳列も4件開催され（本誌pp.10～11参照）、それぞれ多くの来場者を集めていた。

第一部門研究（新島研究）では、2021年度に続き、月例研究会をZoom併用により開催した。会員には会場（寒梅館大会議室）での参加も可能としたが、研究会関係者に高齢者が比較的多いため、会員以外はZoomでの参加とし、感染拡大回避に努めた。8月の一日研究会についても、2021年度に続きZoomによる午前中のみで開催とした。オンライン研究会は、遠方からも参加可能となり好評である一方、対面形式よりも会員間の交流が薄れ、活動の停滞を指摘する声もあがっている。

学生アルバイトによる資料整理業務も、作業場所となる資料室での密を避け、文具やPCの消毒を行う等の対策を取りながら、資料調査・データ入力を進めたが、授業が対面に戻るにつれ、勤務に入ることの難しい学生が増え、作業の進捗に影響する事態が生じているのは悩ましいところである。

2023年度に向けて

新型コロナウイルス感染症の累計感染者数は、日本で3,330万人、世界全体で7億6,100万人を超えた（3/20時点 WHO集計）。世界中で「ウィズコロナ」の動きが加速するなか、日本でも政府により新型コロナウイルス感染症の感染症法上の5類への位置付け変更、マスク着用についての考え方が示された。これを受けて本学では、「ガイドライン8版」及び「手引き」は3/31をもって廃止され、4/1からは「同志社大学版COVID-19感染防止対策」（以下、「対策」）に即した行動を取ることが要請され、さらに、新型コロナウイルス感染症への対処を目的として設置された緊急対策本部は3/31で解散し、4/1以降、感染拡大防止にかかる対応はリスク管理本部が担うこととされた（「対応25報」3/9）。社史でも、3/15～17に第4回同志社社史資料センター委員会で「旧邸ガイドライン」、3/20～23に第6回ハリス理化学館同志社ギャラリー運営委員会で「ハリスガイドライン」を廃止、「対策」に即した対応をとることを決定した。しかし、コロナ禍が終息したわけではなく、むしろ、基本的な感染対策の多くが一人ひとりの判断に委ねられる分、社史としてもセンターの運営にあたっては、十分に注意を払い、実践していくことが求められている。

資料業務

1. 資料整理

1. 資料業務

・ 収蔵資料	
遺品庫	6,594点
資料室	14,013点
整理済み資料	61,422件
・ 蔵書冊数	
図書	13,292冊
逐次刊行物	1,253タイトル

2. 参考業務

・ レファレンス数	684件
文献調査	205件
事項調査	445件
その他	34件

2. 資料提供(写真資料を中心に)

福祉新聞社 関西支局
京田辺市 市民部市史編さん室
株式会社工房レストア
株式会社ひでみ企画
公益財団法人近江兄弟社
株式会社NHKエンタープライズ
株式会社あめりか屋
桜美林学園 総合企画部広報課
株式会社JR北海道ソリューションズ
熊谷市教育委員会
創価大学 教育学部
福島県 教育庁義務教育課

株式会社BEGIN
株式会社リライトコンテンツ
浩然社
一般財団法人福島県教育会館
株式会社講談社
株式会社MBS企画
株式会社スリーシーズン
株式会社ダイメディア
株式会社エディットプラス
ラムダプロダクション合同会社
会津若松市 観光商工部

博物館実習の受け入れ

【同志社大学「学外実習」受け入れについて】

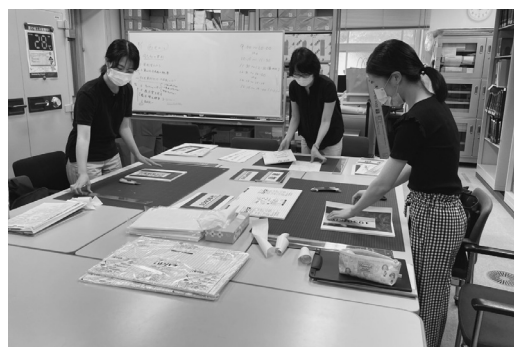
本年度は3年ぶりに「学外実習」を実施し、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策を実施しながら、2期（第1期：8月22日～24、第2期：8月29～31日）で10名の学生を受け入れた（実習時間は1日3時間、合計9時間）。実習では大学アーカイブズと展示活動に関する講義を通じて公文書と私文書に対する理解を深め、新島遺品庫では資料の取り扱いに関する実習を実施した。



【同志社女子大学「博物館実習」受け入れについて】

本年度も、新型コロナウイルス感染症予防対策を講じつつ、2名の学生を受け入れた。実習は8月1～5日の5日間で、毎日6時間の実習を行った。実習内容は、ハリス理化学館同志社ギャラリー第26回企画展 同志

社大学商学部100周年「靈智を磨きて、学徒を育つ—同志社高等商業学校のあゆみ—」企画展示室1の東側壁面の展示設営をすることを最終的な目標とした。そのため、初日に社史資料センターの業務や展示について説明し、資料室案内を行った。二日目にはハリス理化学館同志社ギャラリーの常設展示室を利用し、資料出しやキャプション作り、展示替えを実習した。そして三日目以降に企画展のキャプションの作成、資料出し、展示設営を行った。実際に展示する資料に触れ、またそれを来館者に伝わるようにみせる工夫や資料の保護について段階的に学ぶ機会となった。



『同志社百五十年史』編纂

『同志社百五十年史』編纂の進捗状況

『同志社百五十年史』編纂員 阿部 奈緒美 日和 由希 坂本 卓也

同志社150周年記念事業のひとつとして、『同志社百五十年史』の編纂が進行している。全3巻で構成され、第3巻部局編は創立150周年を祝う2025年秋に、通史編の第1巻と第2巻は2027年春までに順次刊行予定である。本事業は、法人内および関係各位の協力を得て、『同志社百五十年史』編纂委員会と本センターが中心となって取り組んでいる。2022年度、同編纂委員会は計11回開催された。また編纂員・編纂補助員各1人が新たに加わり、編纂担当の特定業務職員は計7人となった。各巻編纂の進捗状況は、次のとおりである。

最初に刊行される第3巻は、同志社の周年史としては初の部局編である。法人内全学校と事務部門を含む各部署、関係諸機関の沿革と現況を記述する。2022年4月以降、各項目担当執筆者に理事長による委嘱状を送付した。原稿の提出締切は、2023年3月末であった。この間、編纂員と編纂補助員、社史資料調査員等の本センタースタッフが、執筆者からの問い合わせや資料調査依頼などに対応してきた。179人（2023年3月現在）の執筆者の方々には、本務等でご多忙な中、百五十年史編纂にご尽力いただいている。2023年度には、全原稿内容の調整や修正依頼等、書籍化に向けての作業を進める。

通史編である第1巻は、創立以後約75年間を中心にまとめ、2026年3月に刊行予定である。編纂作業の一環として、2020年12月から主に『京都日出新聞』（『京都新聞』の前身）のマイクロフィルム記事検索作業に取り組んでいる。2023年3月現在、1885（明治18）～1917（大正6）年までの検索を終え、約1万1,000件の同志社関連記事データを抽出している。これらの記事により、各時期の同志社を巡る状況や雰囲気を確認することができる。今後は府庁文書等その他の資料調査にも努めながら執筆依頼を行い、刊行に向けて引き続き作業を進めていく。

通史編のうち1950年代以降を扱う第2巻の編纂について、現在は主に資料調査に取り組んでいる。具体的には、執筆に際しての基礎資料となる各種刊行物・会議記録等の資料リストや、参考資料としての年表の作成にあたっている。さらに学内の各学部や事務室を訪問して、執筆に利用可能な資料の調査も実施している。これらと並行して、執筆候補者の検討も進めている。大学以外の法人内の各学校（女子大学も含む）については、それぞれの学校に執筆への協力を仰ぐ方針とし、各学校を訪問して説明を行った。大学部分については、時代ごと・分野ごとに執筆候補者の選定を進めている。2023年度には正式に執筆を依頼し、2027年3月の刊行を目指して取り組んでいく。

今後も執筆者および関係各位の皆様には、本事業への一層のご理解とご協力を賜りたい。

展 示

1. 展示活動

ハリス理化学館同志社ギャラリー企画展示・特集展示

特集展示

テーマ：宮廷ゆかりのひなめぐり展
期 間：2022年3月11日(金)～4月20日(水)
主 催：同志社大学歴史資料館
来場者数：2,914人
実施日数：35日



第25回企画展

テーマ：書におぼえあり—先人の書跡、同志社の足跡—
期 間：2022年4月5日(火)～6月5日(日)
主 催：同志社大学同志社社史資料センター
来場者数：4,213人
実施日数：48日



特集展示

テーマ：二条家文書—和歌文学の世界—
期 間：2022年7月2日(土)～8月2日(火)
主 催：同志社大学歴史資料館
協 力：同志社大学宮廷文化研究センター
来場者数：2,046人
実施日数：22日



第26回企画展

テーマ：同志社大学商学部100周年
霊智を磨きて、学徒を育つ—同志社高等商業学校のあゆみ—
期 間：2022年8月9日(火)～10月9日(日)
主 催：同志社大学同志社社史資料センター
協 力：同志社大学商学部
来場者数：4,282人
実施日数：46日



第27回企画展

テーマ：源氏物語の世界—宮廷文化の余薫—
期 間：2022年10月29日(土)～12月17日(土)
主 催：同志社大学歴史資料館
共 催：同志社大学宮廷文化研究センター
協 力：同志社大学図書館、同志社大学文化情報学部
来場者数：7,599人
実施日数：42日



第28回企画展

テーマ：「社史」と呼ばれて60年 Keep!—社史は宝箱—
期 間：2023年3月14日(火)～4月28日(金)
主 催：同志社大学同志社社史資料センター
来場者数：2,905人(2023年3月31日現在)
実施日数：41日
展示解説：①3月25日(土) 17名参加
②4月15日(土) 5名参加



常設展示室「同志社の今」特別陳列

第37回

テーマ：同志社大学写真同好会 新人・2回生展
期 間：2022年9月27日(火)～10月2日(日)
主 催：同志社大学写真同好会
来場者数：735人
実施日数：6日



第38回

テーマ：同志社大学美術部クラマ画会後期展
期 間：2022年10月18日(火)～10月22日(土)
主 催：同志社大学美術部クラマ画会
来場者数：391人
実施日数：5日

第39回

テーマ：同志社大学書道部書展二回生展「結」
期 間：2022年10月25日(火)～10月30日(日)
主 催：同志社大学書道部
協 賛：同志社大学書道部後援会
来場者数：602人
実施日数：6日

第40回

テーマ：同志社女子大学学芸学部メディア創造学科有賀ゼミ生卒業制作
体験型空間作品展示「Link」
期 間：2022年11月4日(金)～11月13日(日)
主 催：同志社女子大学学芸学部メディア創造学科有賀ゼミ 平井 舞、柳井 真由
来場者数：523人
実施日数：9日

第41回

テーマ：文化財のもつチカラー熊本洋学校教師館(ジェーンズ邸)復興までのあゆみー
期 間：2023年3月14日(火)～4月28日(金)
共 催：同志社校友会熊本県支部、同志社大学同志社社史資料センター
特別協力：ジェーンズの会
後 援：熊本県、熊本市、熊本県教育委員会、熊本日日新聞社、同志社同窓会熊本支部
来場者数：2,762人(2023年3月31日現在)
実施日数：41日



2. 展示協力

新島会館への展示協力

「新島八重の生涯」をテーマに、新島八重関係資料(レプリカ)と写真パネルを貸出

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展への展示協力

上記で実施された第14期展「同志社のORIGIN—ALL DOSHISHAからのサポート—」(会期：2022年3月～6月)、第15期展「新島襄の学校構想—新島の描いたVisionとChallenge—」(2022年7月～10月)、第16期展「新島襄の遺した言葉」(2022年10月～2023年3月)において企画立案準備設営に関して協力

地域協力

- ・ 2022年10月7日(金)～10月10日(月・祝) 源氏藤袴会主催の「藤袴祭」でスタンプラリーに協力

公開講演会

ハリス理化学館同志社ギャラリー特別写真展

「文化財のもつチカラー熊本洋学校教師館(ジェーンズ邸)復興までのあゆみー」

公開講演会①

演 題：「ジェーンズの教育」
講 師：黒田 孔太郎 氏(ジェーンズの会
副会長、元ジェーンズ邸館長)
日 時：2023年3月25日(土)
13：00～15：00
場 所：至誠館2番教室
(同志社大学今出川キャンパス)
参加者：13名

公開講演会②

演 題：「洋学校の開設と青年たちの志」
講 師：猪飼 隆明 氏(ジェーンズの会
会長、大阪大学名誉教授)
日 時：2023年4月15日(土)
13：00～15：00
場 所：明德館1番教室
(同志社大学今出川キャンパス)
参加者：29名

研究活動

第1部門研究(新島研究)の研究会や機関紙の刊行は次の通りである。

1. 第1部門研究(新島研究)研究会(代表 横井 和彦)

第202回例会	2022年4月11日(月) 『新島研究』113号論評会 「新島襄が英書で学びなおした航海学」 報告者：三好 彰 論評者：大鉢 忠 「新島襄と『聯邦志略』」 報告者：三好 彰 論評者：森 一郎
第203回例会	2022年5月9日(月) 「ラーネットの経済思想と近代日本の経済学—同志社経済学の事始め—」 (Economic Thought of Dwight Whitney Learned and Modern Japanese Political Economy: Beginning of Economics in Doshisha) 報告者：西岡 優美、西岡 幹雄
第204回例会	2022年6月13日(月) 「新島襄の日米文化交流—温故知新の新島研究—」 報告者：大鉢 忠
第205回例会	2022年7月11日(月) 「女性医療宣教師Sara Craig Buckleyについて」 報告者：三木 恵里子
第206回例会	2022年8月6日(土) 企画テーマ「同志社創立150周年記念事業について」 司会：横井 和彦 導入「同志社創立150周年記念事業の概要について」 報告者：横井 和彦 報告1「同志社・新島かるた」 報告者：石川 眞弓 報告2「同志社オリジナル賛美歌の制作」 報告者：森田 喜基 報告3「『同志社百五十年史』編纂事業」 報告者：小林 丈広 報告4「FV(フューチャービジョン)、Challengeについての説明」 報告者：長瀬 正尚 自由討議 ファシリテーター：横井 和彦
第11回同志社を語る会	2022年9月12日(月) 『『新島襄の足跡を辿る』DVD第13弾「吉野の山林王、土倉庄三郎の故郷を訪ねて」 (改訂版)と第6弾「風間浦・函館・札幌編」(再々改訂版)の視聴と解説」 報告者：田島 繁
第207回例会	2022年10月17日(月) 「柏木義円の勇み足？」 報告者：坂井 誠
第208回例会	2022年11月14日(月) 「昭和期(1926-1945年)同志社高等女学部の年表から」 報告者：森 一郎
第209回例会	2022年12月12日(月) 「新島襄の志を継いだ人たち —拙著『新島学園ものがたり』&同『小新島たらん』をめぐる—」 報告者：本井 康博
第210回例会	2023年1月16日(月) ※人文科学研究所第3研究の1月研究会が合流しての開催 「バーナード・リーチと同志社—新島襄宛E.H.シャープ英文書簡を手掛かりに—」 報告者：山下 智子
第12回同志社を語る会	2023年3月13日(月) 「青森県風間浦村・同志社交流30年を語る」 司会：本井 康博、竹山 幸男 パネリスト：富岡 宏、村上 純一、越膳 泰彦、石川 禎大、平田 和彦、駒嶺 鍊

第1部門研究(新島研究)運営委員会(2022年度)

横井 和彦(代表)、生田 香緒里、工藤 尚子、森 一郎、森永 長壹郎、本井 康博、大鉢 忠、大島 中正、佐藤 友亮、竹山 幸男、Nicholas John Teele、山下 智子

2. 第1部門機関誌

『新島研究』第114号 A5判 152頁 2023年2月12日発行

論 叢	企画テーマ「同志社創立150周年記念事業について」 同志社創立150周年記念事業の概要について 同志社・新島かるた 同志社オリジナル賛美歌の制作 『同志社百五十年史』編纂事業 FV(フューチャービジョン)、Challengeについての説明 同志社大学神学科の日本西部神学校への統合拒否と、 その際語られた「新島精神」 ラーネットの経済思想の形成と展開 —初期同志社と近代日本の経済学— 湯浅初の「学力履歴」 —熊本県立洋学校、慶應義塾幼年局、同志社英学校—	横井 和彦 石川 眞弓 森田 喜基 小林 丈広 長瀬 正尚 森田 喜基 西岡 優美 西岡 幹雄 山下 智子
研究ノート	女性医療宣教師Sara Craig Buckleyの 京都看病婦学校・同志社病院における活動	三木恵里子
資料紹介	新島襄の英文書簡と山本覚馬と宣教師の出会い	森永長壹郎
コ ラ ム	Amherst Collegeのモットー TERRAS IRRADIANTに関する一考察	有賀 誠一

『新島研究』編集委員会(2022年度)

横井 和彦(委員長)、生田 香緒里、工藤 尚子、森 一郎、森永 長壹郎、本井 康博、大鉢 忠、大島 中正、佐藤 友亮、竹山 幸男、Nicholas John Teele、山下 智子

3. 機関誌

『同志社談叢』第43号 A5判 236頁 2023年3月1日発行

論 叢	阿部政恒研究試論—北海道時代を中心に— M・F・デントンの第1回賜暇休暇(サバティカル)1900/3~1901/9 —その目的と成果を検証する—	室田 保夫 坂本 清音 八木谷涼子
資料紹介	「池袋清風日記 明治二十二年」資料紹介・翻刻(二) 増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会(三) 三田谷啓著“Motherhood Education in Japan(日本における母性教育)” 1963年ヴォーリス建築事務所による同志社大学中央図書館設計	富田知恵子 滝澤 民夫 小野 尚香 駒松 仁子 柏居 宏枝
目 録	新島襄関連の文献目録(41) 購入資料・受贈資料目録	

『同志社談叢』編集委員会(2022年度)

服部 伸(委員長)、伊藤 彌彦、小林 丈広、物部 ひろみ、大島 中正、山下 麻衣、横井 和彦

4. 刊行物

『同志社大学 同志社社史資料センター報』第18号(2021年度)
(2022年4月発行)

『2022年度 新島襄生誕記念懸賞論文 入選作品集2023』
(2023年3月発行)

『新島襄生誕記念懸賞論文 入選作品集』編集委員会(2022年度)
工藤 尚子(委員長)、本井 康博、Nicholas John Teele、山下 智子

第180回 新島襄生誕記念会

日時：2023年2月14日(火) 17：30～19：00

場所：同志社礼拝堂

表彰

第30回新島研究論文賞

三木 恵里子(京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学生)

第30回新島研究功績賞

森田 喜基(同志社大学キリスト教文化センター准教授)

山下 智子(同志社女子大学現代社会学部准教授)

新島襄生誕記念懸賞論文(2022年度)

【中学校の部】

最優秀賞

亀廣 伊佐(同志社中学校1年)

「妻に仕えた侍、新島襄から学ぶ真の平和とは」

優秀賞

上田 愛歩(同志社女子中学校1年)

「ジョゼフ・ニイシマを支えたアメリカの母たちの愛」

中井 理緒(同志社香里中学校2年)

「新島襄が思う真理とは～新島襄の生涯から学ぶ～」

佳 作

谷口 結惟(同志社中学校1年)

「新島襄とキリスト教～なぜ彼は人を惹きつけたのか～」

中田 理恵子(同志社女子中学校1年)

「安部磯雄と同志社～同志社から早稲田へ～」

五十洲 ひなた(風間浦中学校3年)

「新島襄の『想い』とともに」

【高等学校の部】

最優秀賞

小金澤 一心(新島学園高等学校3年)

「新島襄と明治政府の教育理念の違い」

優秀賞

河野 采音(同志社女子高等学校3年)

「勝海舟が見た新島襄と同志社

～彼等は世より取らんとす 我等は世に与えんとす～」

佳 作

新宮 萌楓(同志社女子高等学校3年)

「隔離から称賛への道のり～神山復生病院で学んだ摂理～」

高橋 理音(同志社女子高等学校3年)

「新島襄と渋沢栄一～二人の男が見た日本の未来～」

高木 啓佑(新島学園高等学校3年)

「『地政学』の面からみる新島襄の戦略と選択」

【大学・短期大学・大学院の部】

佳 作

霜永 智弘(同志社大学大学院博士課程(後期課程)1年)

「徳富蘇峰による同志社での平民主義思想の形成と労働組合の誕生」

ハリス理化学館同志社ギャラリー

本ギャラリーはハリス理化学館（1890年竣工、1979年重要文化財指定）を2013年にリニューアルした展示施設である。同志社の歴史と創立者新島襄の今に息づく精神を2つの企画展示室と6つテーマに分けた常設展示室に所蔵資料を展示して紹介している。

開館時間 10:00～17:00（入館受付は16:30まで）
閉館日 日曜日（企画展開催中は開館）月曜日、祝日
ゴールデンウィーク・夏期休暇・冬期休暇の一定期間
実施日数 265日（企画展示室は153日）



2022年度入館者数（2022年4月1日～2023年3月31日）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
総入館者	3,107人	2,124人	2,545人	2,146人	2,916人	2,478人
同志社のあゆみ	1,004人	809人	968人	962人	1,453人	1,054人
企画展示室	1,981人	1,705人	527人	—	1,591人	1,822人
京都の中の同志社	1,337人	1,139人	1,172人	1,905人	2,272人	1,570人
同志社の今	1,162人	911人	1,134人	1,217人	1,969人	1,698人

10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
3,547人	5,600人	2,615人	1,435人	1,943人	4,346人	34,802人
1,447人	2,239人	1,303人	823人	1,269人	1,960人	15,291人
1,471人	5,086人	1,911人	—	—	2,905人	18,999人
1,835人	2,938人	1,328人	740人	1,185人	2,336人	19,757人
1,997人	2,053人	1,401人	872人	1,108人	2,762人	18,284人

新島旧邸

1875（明治8）年11月29日、同志社英学校がこの地に開校したことを記念し、建学の精神を体感する場として公開している。新島襄の私邸で、ボストンの友人J.M.シアーズの寄付によって1878（明治11）年に建てられた。1985（昭和60）年6月1日に建物が京都市から有形文化財に指定され、翌年6月2日に家具57点が、さらに1993（平成5）年4月1日に付属屋と門が追加指定された。建物の保護のため、公開と保存を両立する形に公開方法を見直し、通常公開は、旧邸の周囲から建物内部を見学していただくに留め（建物内への入場は不可）、特別公開のみ、母屋1階と付属屋への入場を可としている。

開館時間 10:00～16:00（入館受付は15:30まで）
通常公開 4月～7月、9月～11月、3月の毎週火・木・土（祝日を除く）
特別公開 8月7日（オープンキャンパス）、10月1日～5日、ホームカミングデー、
同志社創立記念日、3月20日～22日

※新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため、4月1日～5日の春の特別公開は中止

2022年度見学者数

4月	5月	6月	7月
428人	290人	398人	203人
9月	10月	11月	3月
349人	910人	815人	824人
合計	期間外		
4,306人	89人		



委員会

同志社社史資料センター委員会 (2022年度)

服部 伸	同志社社史資料センター所長(委員長)	山田 邦和	女子大学現代社会学部教授
大島佳代子	教務部長	庄司 春子	中学校・高等学校教諭
西岡 徹	事務局長	藤井 宏樹	香里中学校・高等学校教頭
小山 隆	人文科学研究所長	酒井 由行	女子中学校・高等学校教頭
菊田 千春	歴史資料館長	西田喜久夫	国際中学校・高等学校教頭
朝田 邦裕	広報部長	小林 丈広	文学部教授
柳井 望	法人事務部長	横井 和彦	経済学部教授

同志社社史資料センター運営委員会 (2022年度)

服部 伸	同志社社史資料センター所長(委員長)	柳井 望	法人事務部長
大島佳代子	教務部長	山田 邦和	女子大学現代社会学部教授
西岡 徹	事務局長	小林 丈広	文学部教授
小山 隆	人文科学研究所長	横井 和彦	経済学部教授
菊田 千春	歴史資料館長		

ハリス理化学館同志社ギャラリー運営委員会 (2022年度)

新関三希代	副学長(委員長)	山口 数宏	総務部長
服部 伸	同志社社史資料センター所長	柳井 望	法人事務部長
菊田 千春	歴史資料館長	村上 みか	キリスト教文化センター所長
上田 雅弘	商学部長	越前 俊也	文学部教授
竹田 正樹	スポーツ健康科学部長		

ハリス理化学館同志社ギャラリー運営委員会部会 (2022年度)

服部 伸	同志社社史資料センター所長(部会長)	水ノ江和同	文学部教授
若林 邦彦	歴史資料館教授	中安 真理	文化情報学部准教授
浜中 邦弘	歴史資料館准教授	小枝 弘和	社史資料調査員
木谷 佳楠	神学部助教	松居 宏枝	社史資料調査員
小林 丈広	文学部教授	富田知恵子	社史資料調査員

徳富基金運営委員会 (2022年度)

八田 英二	同志社総長・理事長(委員長)	川満 直樹	商学部教授
徳富 次郎	社友	柳井 望	法人事務部長(幹事)
小林 丈広	文学部教授		

『同志社百五十年史』編纂委員会 (2022年度)

小林 丈広	文学部教授(委員長)	大島 中正	女子大学表象文化学部教授
服部 伸	同志社社史資料センター所長	天野 太郎	女子大学史料センター長
山田 史郎	名誉教授	柳井 望	法人事務部長

同志社社史資料センター (2022年度)

	所長	服部 伸
事務室	事務長	太田 博之
	係長	竹森 宏和
	社史資料調査員	小枝 弘和
	社史資料調査員	松居 宏枝
	社史資料調査員	富田知恵子
	『同志社百五十年史』 編纂員	阿部奈緒美
	『同志社百五十年史』 編纂員	日和 由希
	『同志社百五十年史』 編纂員	坂本 卓也 (2022年7月より)

事務室

『同志社百五十年史』 編纂補助員	志賀 祐紀
『同志社百五十年史』 編纂補助員	山口 潔子
『同志社百五十年史』 編纂補助員	熊田 圭太
『同志社百五十年史』 編纂補助員	大塚 淑裕
契約職員	土井真由美
アルバイト	3名
研究補助員	1名

資料整理

学生アルバイト	交代勤務
大学院生	7名登録
学部生	28名登録

同志社社史資料センター利用要項

2009年 5月19日制定
2010年 5月20日改正
2012年 2月20日改正
2021年11月17日改正

(目的)

第1条 この要項は「同志社社史資料センター規程」の第3条第1号に基づき、同志社社史資料センター（以下「センター」という。）が所蔵する資料等（以下「資料等」という。）の利用に関する必要事項を定める。

(利用に関する業務)

第2条 センターは、資料等の利用に関して次の業務を行う。

- (1) 閲覧
- (2) 複写
- (3) 貸出
- (4) 参考調査

(公開と利用制限)

第3条 資料等は公開を原則とするが、次のものは利用を制限する。

- (1) 新島遺品庫資料
- (2) 新島旧邸文庫資料
- (3) 非公開を条件に寄贈・寄託を受けている資料
- (4) 破損又は汚損を生じる恐れがある資料
- (5) 個人情報に関する資料
 - ア) 現存者の個人情報に関する資料については、「個人情報の保護に関する法律」並びに「個人情報保護の基本方針」及び「同志社個人情報保護規程」に基づく。
 - イ) 物故者の個人情報に関する資料のうち以下のものについてはア)に準ずる。
 - ① 没後50年未満のもの
 - ② 故人の重大な秘密であり、公開により遺族等に不利益を与える恐れがあるもの
- (6) センター所長（以下「所長」という）が特に指定する資料等

(利用時間)

第4条 資料等を利用できる時間は、大学が定める休日を除いた平日の9時から17時とする。

2 所長が必要と認めたときは、利用時間を変更することがある。

(閲覧)

第5条 資料等の閲覧は、センター内所定の場所で行うものとする。

(複写・撮影)

第6条 資料等の複写・撮影は、著作権法の範囲内で行うものとする。

- 2 破損の恐れがある資料等は、複写・撮影を制限する。
- 3 出版、放映、展示等のために複写・撮影する場合は、所定の申請書を提出し、所長の承認を得なければならない。

(貸出)

第7条 貸出ができる資料等は、同志社大学学術情報システム（DOORS）に登録された図書とする。ただし、禁帯出図書及び逐次刊行物を除く。

2 貸出を認められる者は、以下とする。

- (1) 同志社大学学生・教職員
- (2) 同志社女子大学学生・教職員
- (3) 同志社大学と同志社女子大学の図書館利用カード所持者
- (4) センターが設置する部門研究の参加者
- (5) その他、所長が特に認めたもの

3 貸出冊数及び貸出期間は、本学図書館の貸出要領に準ずる。

4 返却を延滞した場合は、当該資料を返却するまで貸出を停止する。

(特別貸出)

第8条 出版、放映、展示等のため資料等を貸出する場合、利用者は所定の申請書を提出し、所長の許可を得なければならない。

(紛失・汚損)

第9条 資料等を紛失・汚損したとき、所長は現物又は現金による弁償を求めることができる。

(参考調査)

第10条 センターは、利用者の求めにより次の範囲で参考調査を行い、情報を提供する。

- (1) 同志社関係資料の検索
- (2) 同志社史に関する事実

(要項の改廃)

第11条 この要項の改廃は、同志社社史資料センター委員会において決定する。

(附則)

この要項は2021年11月17日より施行する。

同志社大学

同志社社史資料センター報 第19号

発行日 2023年4月30日

編集・発行 同志社大学 同志社社史資料センター

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

Tel. 075-251-3042 Fax. 075-251-3055

<https://archives.doshisha.ac.jp/>

表紙写真：2022年に同志社社史資料センターに寄贈された同志社大学English Speaking Society (D. U. E. S. S.) 発行の英文雑誌“DOSHISHA CHIMES” (初期は“DOSHISHA CHIME”)。1955 (昭和30) 年に発刊され、1977 (昭和52) 年に18号で終刊した。E. S. S.は2020年に創部100周年を迎え、2021年9月には『同志社大学ESS創部100周年誌』を刊行している。